

インターネット版

# 白夜

第4号（スウェーデンの音楽特集号）

2021年10月

北海道スウェーデン協会

当協会機関紙「白夜」第4号をお届けします。  
今回は、スウェーデンの音楽特集です。専門  
の見地からの大変貴重な原稿が集まりました。  
地元音楽に精通する三人の会員のほか、北欧音  
楽研究家の朝倉崇氏にも、特別に御寄稿いた  
だいています。ありがとうございました。

スウェーデンの音楽の具体像がわかる資料  
として、他にはない極めて高い価値があるか  
もしれないと、編者は秘かに思っておりますが、  
もちろん、単に読み物としても面白いので、皆  
様に楽しんでいただければ幸いです。

今回収めたのは、以下の四編です。

- 1 スウェーデンを代表する作曲家アルヴェ  
ーンとの出会い／朝倉 崇
- 2 スウェーデン音楽の特徴について／今井  
紀太（のりたか）
- 3 勉強の傍らで音楽のレッスンも…ストッ  
クホルムの音楽学校のお話／高松 要
- 4 夏の歌のおもいで／横山 隆

なお、インターネット版白夜では、自由なテ  
ーマの下で執筆いただいた会員の投稿をまと  
めて、読者の皆様にお読みいただきたいと考  
えています。

引き続き、様々な原稿をお待ちしています  
ので、会員各位におかれては、思いついた  
ときには、word文書（40字×40行）を使  
って原稿を事務局までお寄せいただければ  
幸いです。原稿の量は1600～3200字程  
度が基本ですが、必ずしもこれに囚われな  
くとも結構です。必要に応じて、写真も  
添付ください。皆様の原稿をお待ちして  
おります。

## スウェーデンを代表する作曲家アルヴェ ーンとの出会い

北欧音楽研究家 朝倉 崇



アルヴェーンが晩年を過ごしたダーラナの風景

### アルヴェーンとの出会い

あれはもう30年くらい昔のことになる。た  
またまNHKのクラシック番組を見たところ、北  
欧作曲家ばかりのプログラムによる演奏会を  
やっていた。指揮はユッカ＝ペッカ・サラステ。  
選曲されていたのはノルウェーの作曲家グ  
リーグ、フィンランドの作曲家シベリウス、デン  
マークの作曲家ニールセンの作品。ここまで  
ならクラシック音楽にちょっと詳しい人なら  
ピンと来るかもしれないけれども、名前は覚  
えていないがアイスランドの作曲家の作  
品、そしてスウェーデンの作曲家アルヴェ  
ーンが取り上げられていた。それまで寒々  
しくも広大に広がる透明感ある世界と自  
分勝手に抱いていた北欧クラシックのイ  
メージが、このアルヴェーンとの出会い  
によって見事に打ち砕かれてしまった。こ  
の時演奏された曲が、アルヴェーン  
の代表作であるスウェーデン狂詩曲第1  
番「真夏の徹夜祭」だった。今まで聞  
いたことのない柔らかい響き、中間色  
のような明るさ、天真爛漫な躍動感、  
人の香りのする豊かな自然の世界が  
表現されていた。もちろん名曲アル  
バム風に現地の映像も豊富だったので、  
その影響もかなり手伝ってのことだ  
けけれども、今まで知らなかった北  
欧に出会った瞬間だった。

## それまでの私

私は小さい頃からクラシックのオーケストラ作品が大好きで、チャイコフスキーの白鳥の湖全曲や、気に入った音楽は聞き覚えで口ずさんでいた。中学や高校の頃には、お年玉やお小遣い、たまに親におねだりして、オーケストラ作品のスコア（総譜）を買いまくっていた。スコアというのはオーケストラの全てのパートの楽譜が網羅されたもので、指揮者が使用している楽譜だ。色々細かい情報が満載なので、気になったらよくスコアを眺めていた。そして、チャイコフスキーを中心に民族色の強い作曲家が好きになっていた。当然北欧作曲家のグリーグ、シベリウス、ニールセンも好きな作曲家だった。そこへで新たに飛び込んできたアルヴェーンという作曲家の情報に興味し、何でも入手できるという評判の大阪の楽譜専門店であるササヤ書店に尋ねてみた。「出版されているけど、海外発注です。」と言われ、「6000円台くらいです。」と言われ、学生だった当時としては目が飛び出る金額で、うわって思った。でもどうしても欲しくて、お年玉を貰ってから注文し、2~3ヶ月待ちましたね。船便だったので。。。当時は1000円あれば、国内出版社の楽譜がうまくいけば2冊買ったので、2000円くらい上乗せすると航空便で1週間~2週間で購入できると言われたけれど、スコア3冊~4冊とを秤にかけると、船便という結論になった。現在では、ものによっては、ネットで無料でスコアはダウンロード出来てしまう。便利で低コストな時代になりましたね。高校の時にブラスバンド部に入り、指揮者の経験もし、大学でオーケストラに入り、ヴァイオリンを始め、卒業後も、古今東西色々な音楽を指揮したり、所属オーケやエキストラで弾いたりして、たくさんの作品を実演する機会はかなりあったけれど、北欧作品、特にアルヴェーンを取り上げる機会はなかなか得られず、ずっと寝かしていた。しかしようやく室内オーケ的な編成だけれども、仲間を誘って楽団を立ち上げ、その中でこ

れまで何度か演奏することができた。嬉しかった。演奏の質は昔聞いたのとは天と地の差があるけれど、リハーサルの時も本番の時も、そこにはアルヴェーンが紡いだ音の感触があった。上手くなくてもそこには自分たちの紡いだアルヴェーンがあった。そこには他の作曲家では体験できなかったアルヴェーンの世界がしっかりあった。アルヴェーンは素晴らしい作曲家だと思った。アルヴェーンの音楽にはスウェーデンの伝統音楽、自分たちの民族の音楽に対する、とても深い深い愛情がこもっている。スウェーデン人が最も愛する作曲家であるということも頷ける。



毎年4月30日に開催されるヴァルボリの日の様子。ウプサラのヴァルボリはスウェーデン最大のもので屋間はウプサラ市街地が大賑わい

## アルヴェーンについて

アルヴェーンは1872年生まれで、1960年に没し、88歳の長寿であった。その生涯で、大きく分けてストックホルム、ウプサラ、ダーラナ地方と、音楽活動の拠点を移している。若いときから国際的に知られるようになるまでのストックホルム時代。私が最初に出会った代表作の「真夏の徹夜祭」もそのころのものだ。その曲中でスウェーデンの伝統音楽やスウェーデン的な要素をいろいろ盛り込んでいる。またオーケストラレーションも見事で、夏至祭の様子が目に浮かぶような音楽である。そして、1910年からウプサラ大学の音楽監督に

就任し、約30年間も務める。この間にその合唱団のために数多くの合唱曲を作曲している。そして晩年にはダーラナ地方のレクサンド近郊の家（現在はミュージアムになっている）を中心に伝統音楽の宝庫であるダーラナ地方の音楽を取り入れて、極めて民族的な作品を残している。バレエ音楽「放蕩息子」はその最たるものだと思う。交響曲も5曲作曲し、バレエ音楽「山の王」、「グスタフ2世アドルフ」などの大規模なもの、多数の合唱曲、歌曲などいろいろ作品があるが、初めての方にはスウェーデン狂詩曲第1番「真夏の徹夜祭」から始まって、第2番の「ウプサラ・ラブソディ」、第3番の「ダーラナ・ラブソディ」と3つあるスウェーデン狂詩曲から聞いていただいたら良いのではと思う。アルヴェーンゆかりの3つのエリアを音楽旅行できるのではないだろうか。

#### アルヴェーン生誕150周年に向けて

来年2022年はちょうどアルヴェーンの記念すべき生誕150周年にあたる。私が初めてスウェーデンを訪れたのが2014年、その時に現在ミュージアムとなっているレクサンド郊外のアルヴェーンの晩年の家にも訪ねていった。ここを中心に記念イベントが開催されるようであるが、なんとかコロナ禍を乗り越えて来年の夏には現地を訪れたいと思っている。そして日本でもアルヴェーン生誕150周年を記念した企画を、私の現在住んでいる石川県金沢市を中心に行うのはもちろん、全国各地でも記念企画を行うことを考えている。北海道でもまずは5月に予定している。これを機会にアルヴェーンの輪が、日本国内に広まることを願っている。

## スウェーデン音楽の特徴について

今井 紀太



筆者（左）

#### 自己紹介

皆様初めまして。新しく北海道スウェーデン協会の会員になりました。今井と申します。6月に東京から札幌に移住してきました、7月よりスウェーデン協会の会員にならせて頂きました。自分は仕事をしながら音楽をやっています（ギターを演奏しています）。スウェーデンの音楽が好きで、今までに4回スウェーデンへ渡り現地のパブ等を回って音を出したりしていました。音楽をきっかけに文化を通じてスウェーデンとの交流がもてたらと思うようになり、東京ではスウェーデン大使館のイベントにボランティアスタッフとして参加をしたり、スウェーデン商工会議所のイベントに参加をしたりしていました。コロナ過でまだ直接お会いする事ができませんが、改めてこれからもよろしくお願い致します。今回事務局からスウェーデンの音楽をテーマに何かを書いて頂けないかとご提案頂き、僣越ながら記事を書かせて頂きました。よろしくお願い致します。

## 他国と比べた上でのスウェーデンの音楽の特徴

自分は元々70年代のアメリカの音楽が好きで、今までにカナダに1年間、ニューヨークに3ヶ月滞在したことがあります。途中から音楽の傾向がスウェーデンに切り替わり、それからスウェーデンの音楽やスウェーデンの音楽文化が形成されている国民性・地域性について意識して独自に研究をするようになりました。

これは知っている人は知っている事なのですが、スウェーデンは世界に音楽を輸出する国の第3位と言われています。これはアメリカ・イギリスの次にスウェーデンの音楽が多いという事です。スウェーデンは音楽大国なのです。自分がスウェーデンの音楽全般を通して感じる事として、「音楽をていねいにやる国」というイメージがあります。メタルもポップスもジ



ャズも民族音楽もすべて含めて、ミキシングとマスタリングがとてもうまく、全部の音のバランスがとても良いんですね。ジャズに関してはアメリカの古き良きジャズへのリスペクトをもの凄く感じると言いますか、無駄にテクニックに走らないで基本をしっかりやるイメージがあります。自分がスウェーデンで出会ったボーカリストに対してすごく感じた事は、声のピッチ（音程）が正確な人が多かったです。CDと全く同じ声でライブで歌うシンガーなんかもゴロゴロいました。メタルみたいな激しい音楽でも、ドラムの音が埋もれずに全部の音がきちんと分離して聞こえて、小さいライブバー

位の規模でデスメタルとかを聞いても会場を出た後に耳鳴りがするようなことが無かったです。

以前に東京でLEO今井さんという、スウェーデン人と日本人のハーフで日本でプロとして大活躍しているミュージシャンとお会いして話す機会がありました。その時にLEOさんが「スウェーデンでは冬になると日も照らなくなって雪も降って、家にこもるしかやる事がなくなるから、だから音のミキシングとかマスタリングとか作曲とかこだわって研究するようになるんだ」と冗談半分で言っていました。でもこれって結構的を得ている事なのかなと思います。

自分がスウェーデンに行って向こうでミュージシャンと会って、驚いた事があります。それは“アメリカに行った事がないミュージシャン”が多い事です。ユーロ圏内の他のヨーロッパの国は何カ国も行っているが、アメリカには行った事がないみたいな人がゴロゴロいます。だからといってミュージシャンとしてレベルが低い事は決してなく、とてもハイクオリティな音楽を生み出すんですね。スウェーデンだけでも優秀なミュージシャンが育つ位、音楽の土壌ができていますよね。でもって“スウェーデン人での目線”で皆さん音を出されるんですね。

以前にストックホルムで仲良くなったドラマーの友人が仕事で東京に来た事があり、東京でいくつかセッションに連れて行ったことがあったのですが、その際にとて面白い経験をしました。まずその友人のドラマーとしての基本能力が高いというのは第一前提であったのですが、周りの人間とあきらかに音楽を組み立て方、音楽の攻め方の目線が違うんですね。この感覚というのは東京に来てライブをしていた他のスウェーデン人のミュージシャンからも感じました。

それを踏まえて自分がすごく感じた事がありました。それは“日本人がアメリカ音楽の影

響を受けすぎている”という事です。まわりにいる日本人のミュージシャンは皆アメリカ人みたいな事をやろうとするんですよね。でもってやっぱりアメリカ人ではないんだという部分が顕著に分かる。



スウェーデンは移民が多い国、そして養子として他の国の子供を何の抵抗もなく受け入れることができる国。様々なバックグラウンドを持ったミュージシャンが溢れています。そしてそのミュージシャン達は皆、自分達の目線で音を出します。アメリカから来た人、ブラジルから来た人、ウクライナから来た人、自分もスウェーデンで沢山出会いました。スウェーデン人は自分たちと違う目線で音を出す人達の事を面白がれるんですよね。むしろ化学反応を起こすための起爆剤になるからありがたいって捉える事ができるのです。だからこそスウェーデンの音楽は未だに発展し続けているんですよね。

日本の音楽もこうなってほしいなと思います。自分もスウェーデンの音楽が素晴らしいと外でよく話しますが、結局はゴール地点としてはここなんですよ。日本人ならではの目線を考えて音を出したりとか、アメリカ音楽以外の影響を受けている人の事も大事にするとか、そうなってほしいなと思います。

## 勉強の傍らで音楽のレッスンも…ストックホルムの音楽学校のお話

高松 要

私が音楽家としてスウェーデンに居たのはもう 15 年ほど前のことになります。もうそんなに経ってしまったのか…と時の経過に驚くばかりですが、その時に知り合った友人たちとは今でもつながりがあり、あまつさえ音楽の分野でも一緒に仕事をする機会があるということはとても嬉しいことです。

さて、前回に続き今回も拙筆をお見せする機会をいただき、どのようなことを書いたら良いか…と思案いたしましたが、当時私も関りがあった、日本ではあまり見かけない音楽学校のお話をさせていただけたらと思います。

ストックホルム中心部、オーデンプラン Odenplan にほど近いその学校には、主にクラシック音楽の楽器に特化し、プリスクール（小学校入学の前段階、就学前教育ですね。この学校では特に小学校入学の 1 年前のクラスを F-klass または 0 学年と称していました）の児童から、プリカレッジ…高校を卒業し、ヨーロッパ各地の音楽大学を目指して日々努力する学生まで、幅広い年齢層の児童・生徒が籍を置いていました。歴史はまだ浅いものの、現在でも毎年多くの優秀な卒業生を輩出している学校として知られています。



音楽学校の校舎

音楽学校ということで、当然各種音楽のレッ

スンも行われていたのですが、義務教育にあたる年齢の子どもたちが通うということもあり、午前中を中心に授業が生まれ、子ども達は授業を受けつつ、組まれた時間割に沿ってレッスンを受ける日々を送っていました。レッスン内容や担当する音楽の先生の都合によっては、授業中にレッスンが組まれることがあったのですが、その場合は一時的に授業を抜けてレッスンの部屋に行き、終り次第授業に参加する…と、日本の義務教育の学校では見られない光景で、国の教育制度の違いでこうも自由にできるものなのだと関心していたことを覚えています。また、EUの加盟国であり、また多くの移民を受け入れている国ということもあってか、教師も生徒もスウェーデン以外の国の出身が少なくないということも印象的でした。何も知らずに校舎内を歩いていると、先生方や子どもたちから「日本の方ですか？」と日本語で声を掛けられたのは驚きでした、日本の国籍を持つ子ども、日本にいたことのあるスウェーデン人など、多種多様な人がいることは音楽の世界では当たり前のことではあるのですが、スウェーデンではそれが当然なのだと実感した瞬間でもありました。



ルシア祭でのコンサート

音楽に重きを置くだけあり、ほぼ毎週のように発表の機会が設けられ、スウェーデンで重要な夏至やユール、4月末のヴァルボリなど、季節の節目には必ずと言っていいほどギムナジ

ウムとプリカレッジの生徒たちによる合唱が中庭で響き渡っていました。音楽学校の先生方と一緒にエキストラ参加させてもらうことも何度となくありましたが、一緒に夏の歌やルシアの歌を歌うことで、仕事としてステージの上で演奏するのは違う一体感を味わうことができましたね。忘れられないエピソードの一つとして、今でも鮮明に覚えています。

のちにこの音楽学校の生徒たちは、日本の静岡で開催された音楽祭に参加し、静岡の中学校や高校への訪問演奏など、音楽を通して日本と



2009年静岡の学校訪問

の交流に関わってくれました。彼らの多くは今でも音楽家としてスウェーデンやヨーロッパ各地で活躍しています(2018年に開催したダラナシンフォニエッタ日本公演では、北海道でも素晴らしい演奏を披露してくれたことを覚えていらっしゃる方も多いかと思います。実はその来日メンバーの一人にこの学校の卒業生がおりまして、当時ギムナジウムの生徒だった彼女はヴァイオリン奏者としてその音楽学校の選抜オーケストラにも参加しており、当時私も何度か話をしていました。その彼女には10月30日にオンラインコンサートで出演してもらう予定です)。

## 夏の歌のおもいで

横山 隆



クロックスレット小学校の前庭

手前左の平屋が1年生の新入学を待つ校舎

夏の歌と言えど何が好きと問われたら、迷いもなく井上陽水が歌う「少年時代」。

♪夏が過ぎ風あざみ 誰のあこがれにさまよう  
青空に残された 私のころは夏模様♪  
と口ずさんでしまいます。

また、今度はスウェーデンの夏の歌で何が思い出に残っていると問われたら、直ぐに「Idas sommarvisa [Jag gör så att blommorna blommar]」と答え、♪ Du ska inte tro det att blir sommar, ifall inte nån sätter fart på ~♪と口ずさむと思います。題名は「イーダの夏のうた（花を咲かせるおまじない）」とでも日本語に訳せましょうか、以下に少々乱暴ですが歌詞の意識を試みてみます。

### イーダの夏のうた（花を咲かせるおまじない）

夏になるように誰かがおまじないを掛け  
夏らしくなるように少し後押しをしないと  
夏がやってきてお花が咲くことはありません  
ん

私はおまじないを掛け 花を咲かせ  
牛たちが食む牧草地を緑にし  
雪を取り除いたので夏が来ました

私は木桶を水でいっぱい満たし

キラキラ輝く水しぶきを上げて 小川に流れをつくります

私は空一杯に燕を飛ばせ 燕の餌になる蚊で空を満たします

私は木々を芽吹かせ 小鳥たちの巣を青葉の間に間に営ませ

私は夜空の暗闇を穿ち 天空を美しい星たちの光で満たします

私は子どもたちが摘めるように イチゴを実らせ

子どもたちが小さいときに出会う 楽しいささやかな出来事を用意します

そして私は子どもたちが走り回れる 楽しい場所をつくり

子どもたちのころを夏で満たし 夏を子供たちの喧騒で満たします

この歌は 1973 年に製作されたスウェーデン映画「エミールとグリセクノエン」に登場し、エミールとイーダが農場で仕事を一休みしている際にバックグラウンドミュージックとして流されました。

「エミール」シリーズは、スウェーデンが生んだ児童文学者アストリッド・リンドグレーンさんの有名な三部作のひとつですが、みなさんがまず思い出すのは「長靴下のピッピ」。9歳の女の子が一軒家にお猿のアーパと暮らし、船乗りのお父さんの帰りを待ちながら大活躍する物語で、世界中で読み継がれている童話です。何度も映画化されています。

もう一つの代表作が「やかまし村」シリーズ。物語の語り部であるリーサと二人の兄さんラッセとポッセ。さらに三軒並んだ家の二軒には、ウツレと妹のシャスティン、ブリッタとアンナの姉妹と言う子どもたちが住んでいて、遊んで遊んで楽しみまくる「やかまし村の子どもたち」の日常を描いたシリーズです。1986年「やかまし村の子どもたち」1987年「やかまし村の春・夏・秋・冬」と映画化されていますが、「や

かまし村のこどもたちが夏休み前の終業式で必ず歌う讚美歌があります。「花の季節がやってきた」（スウェーデン讚美歌 199 番 1693 年伝統曲）という歌で、この歌をみんなで歌い終わり、先生が「素晴らしい夏を楽しく過ごしてくださいね」と終業式（卒業式）を締めくくると、リーサの心の中で「何かがピョンととびはねました」との表現があります。この童話が描いた時代（1930 年代末）では、この「花の季節がやってきた」がスウェーデンの学校の終業式（卒業式）の定番だったようですが、「エミール」の映画上映以後は、「イーダの夏のうた」が定番になっています。

なお、「花の季節がやってきた」は、スウェーデンのアカペラグループ「ザ リアル グループ The Real Group」の北欧民謡・讚美歌アルバム「ステムニング STÄMNING」で聴くことができますが、その澄んだ北欧の夜明けの光のような歌声には魅了されます。



小学校 2 年の終業式、シャスティン先生からお花を挿してもらった長女

1989 年 6 月 8 日、スウェーデン西海岸イエテボリ市の隣町、メルンダールのクロックスレット小学校で 2 年生の終業式を迎えた我が家の長女は、クラスでの「日本流に呼ぶとホームルーム」を終え、校庭での全校集会にクラスメートと共に参加しました。各学年のクラスごとに壇上上がり、校長先生から「学期中の各クラスのエピソード」などの紹介がありました。長女は「日本から来て 2 年間よく頑張りましたが、

7 月に日本へ帰ります」とのお別れとお褒めの言葉を頂きました。卒業生までの紹介が終わったのち、全員で「イーダの夏のうた」を歌い、夏休みと素晴らしい夏に心を躍らせて式典は締めくくられました。



校庭でのセレモニー 2 年生のクラスが登場（日本では小学校 4 年生に相当）

目くるめくような夏の光に包まれた校庭での風景と、「イーダの夏のうた」のメロディーがスウェーデンのすべての思い出につながり、いまだに生き生きと思い出されます。



終業式の 3 日前に我が家の庭で行ったさよならパーティーでの余興

## 【後記】

いかがでしたでしょうか。

最後の原稿は、夏の歌と言えば井上陽水の「少年時代」、という書き出しでした。

そうですね、普段はヘヴィメタル&プログレッシブロックしか聴かない編者にとっては、そして夏の歌を挙げるなら、英国の老舗バンド、ユーライア・ヒープの「七月の朝」でしょうか。10分もある長尺の曲なので聴くのにも忍耐力がいますが、それがメタル&プログレというものです。「七月の朝」は、名曲中の名曲だとまでは思わないけれど、メタル・ファンにはよく知られた抒情的な佳曲です。少なくとも、メタルは騒々しいだけという世に非常に多い誤解は、こんな曲を聴けば溶けましょう。

今回は音楽特集ということで、白夜第一号でスウェーデンのメタルについて語った編者も、スウェーデンのプログレを紹介しようかと一度は本気で思いました。でも、今回執筆された皆さんのような詳しい音楽理論は持ち合わせておらず、恥ずかしい内容にしかならないと考えて、断念した次第です。

ともあれ、いずれの原稿も、それぞれの執筆者の思いがこもっていると同時に、なかなか一般の書籍等では得られない貴重な情報が満載でしたね。

それでは、次号も、どうぞ、ご期待ください。

インターネット版 白夜 第4号終わり